

とじとじ - 桜丘閉店物語 -

MAMA 著



paikka books

この物語が全て現実に基づいたものとは限りません。

桜丘再開発区域地図
桜丘町1・3・8・11



富士屋本店

かいどう

本
あおい書店

第一章 かいどう

二〇一八年十月二十日

.....

第二章 あおい書店

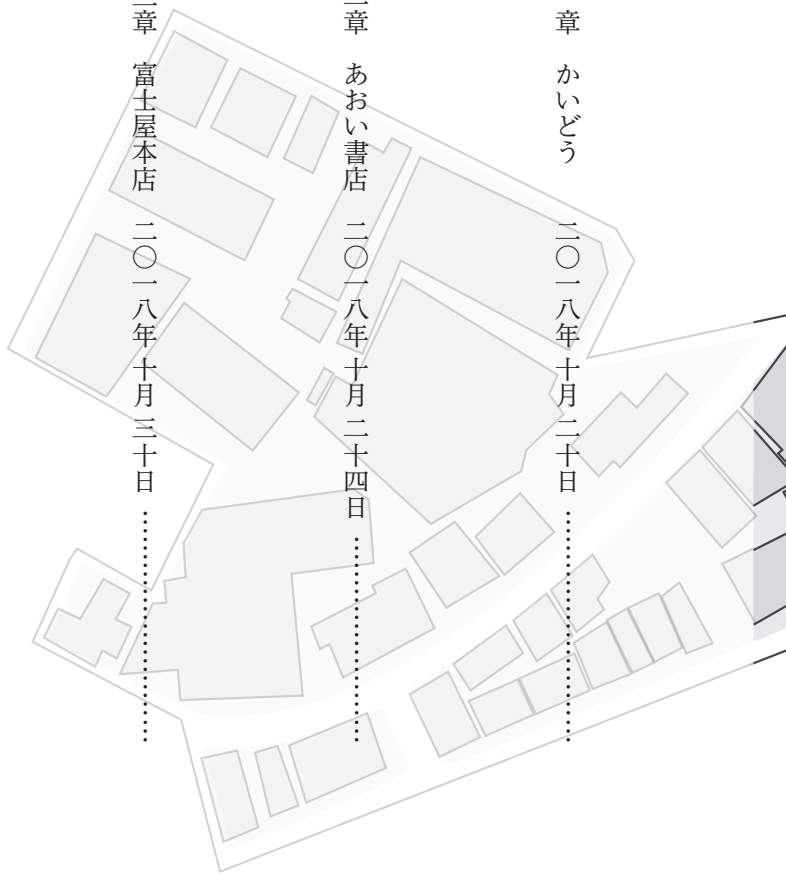
二〇一八年十月二十四日

.....

第三章 富士屋本店

二〇一八年十月三十日

.....



第一章 かいどう



戦前 - 駄菓子屋として創業
昭和 30 年頃 - 食堂へと改装
2018 年 10 月 20 日 - 閉店

「お食事処 SYOKUDOU かいどう」と書かれた壁面看板は、桜丘の風景にすーっと溶け込んでいて、その歴史を感じさせる。和菓子屋として始まり、戦前から桜丘のこの場に店を構えていた。昭和三十年頃から食堂としての営業を始め、六十三年以上愛されている中華料理定食屋である。看板から足元まで目線を落とすと、「いらっしやいませ」と書かれた段差プレートがあり、目線の先に地下へと続く短い階段が見える。階段の左手にはかいどうのメニューの食品サンプルが並んでいる。階段を下り、灰色の自動ドアのボタンを押すと、ガラスの扉が右に動き、白いコックコートを着た四代目の店主と、いまは料理長である先代の店主、そして緑色のエプロンを身に着けた女将が迎えてくれる。

テーブルにつくと、女将さんがお冷を持ってきてくれた。立てかけられたメニューはシンプルなもので、かいどうの良さである素朴さをよく表していた。

「ここのレバニラ定食が絶品なの」

「そうなんだ」

彼女は手慣れたしぐさで女将を呼び、私の注文も聞かずに、レバニラ定食を二つ頼んだ。

彼女は同期だが、誰よりも思い切りがよくハキハキしているし、先輩からも後輩からの信頼も厚い。普段はあまり話をしないが、たまたま休憩が被った彼女と食事をすることにになり、彼女がイチ押し場所を紹介してくれるというので、今二人でここにいるのである。身なりもきちんとしていて、丸の内のビル最上階に店を構えるおしゃれなフレンチレストランに行っただけで、丸の内をイチ押しだということにも驚いているし、なによりも一緒に話しているこの状態に驚いている。なんとなく落ち着かなくて、割り箸を包む「かいどう」と書かれた紙の角を折ったり戻したりしていた。「かいどう」という名の町の食堂があることはわかっていたが、実際に来たことはなかった。薄橙色の椅子に、木製の机。壁紙はクリーム色で、床の色はうすい茶色。落ち着いた装飾で、どこかあたたかい雰囲気がある。店内にはスーツを着た人や、作業着を着た人の笑い声が響いている。こどもが口いっぱいカレーをほおぼり、「おいしいね」と嬉しそうに話す声や、なにやら噂話をする奥様たちの声も聞こえてくる。町の食堂として、愛され続けてきたことを、肌から実感できる。

「ねえ、聞いてる?」

「…あ、ごめん」

「ううん、大丈夫。それで、あなたは休日の日はなにをするの？」

しまった。沈黙を紛らわそうと、彼女の趣味や休日なにをしているのかを聞いたのに、どきまぎして全然聞いてなかった。突然話を振られたことへの動揺を悟られないように水を飲んだ。

「そうだな。映画とか、観るかな」

「そうなんだ。どんな映画？」

「アクションとか」

「え、意外だ」

何が意外かを聞こうとしたところで、女将が定食の準備をすまし、目の前に出来立てのレバニラ炒めが置かれた。「食べよう」と言って、夢中になって食べたのを覚えている。これが、たしかに絶品だったことも覚えている。

あれから何回か彼女とかいどうへ行き、一人でも何度も通うようになっていた。

「おう、今日もレバニラか」と笑う店主と、「空いてるところ座りな座りな」という女将と、もくもくと料理を作る寡黙な料理長がつくるかいどうの雰囲気があると心地よくて、気づけば常連になっていた。彼女がいるのではないかという期待も、抱い

ていたりいなかったり。とにかく足しげく通うようになった。

そんな「かいどう」が、十月二十日で閉店することを知った。

「再開発区域に当てはまる店は、十月いっぱいまで退去するように言われているらしい」
桜丘の喫茶店でどこかの大学生に見える三人がそう話しているのをたまたま耳にした。調べてみるとそれは確かで、店ごとの最終営業日は異なるが、みんな十月いっばいで店を畳むようだ。一月にはビルの解体作業が始まる。あまりにも衝撃で、その日の飲んだコーヒーの味がわからなかった。

かいどうの最終営業日、その長い歴史が終わる瞬間に立ち会おうと、かいどうを訪れた。少し離れた場所でも感じることでできる熱気に気圧されそうになりながらも、なんとか階段を降り、自動ドアの前で立ち止まる。自動ドアには張り紙があり、こう書いてあった。

「いつもご愛顧いただきありがとうございます。この度渋谷南口の都市開発により『かいどう』は平成30年10月20日（土）をもちまして休業させていただきますこととなりました。これまでの皆様のご応援心より感謝申し上げます。誠にありがとうございます。」

張り紙を見ているあいだに、何人かが店の外へ出てくる。一人で来ている者もいれば、家族や同僚と来ている者もいた。みんな今日が最終日だと知っているようだ。店のなかはかなり混んでいた。煙草の煙がたちこんでいて、ビールジョッキやビール瓶が机を埋め尽くしていた。いつもは昼に来ていたし、夜も普段は落ち着いているので、この様子にはかなり驚いた。町の食堂から町の居酒屋へ変わったようだった。人が多く、回転も速くないので、いつもはカウンターに置かれている椅子はしまわれていて、立ち飲みのための場所になっていた。もちろんここも人でいっぱいだった。

女将が私に気が付いて、「いらっしやい」と声をかけてくれた。いつもと変わらぬ緑のエプロンを身に着け、ビール瓶を三本と餃子の皿を手持っていた。「どうぞ」と言っただけをテーブルに置くと、私のほうへ向かってきた。

「ごめんなさいね、お客さんいっぱい、他の人と同じテーブルでもいいかしら」「問題ないです。大丈夫です」

案内されたのは、私がいつも座っているテーブル席だった。すでに三人座っていて、みなひとりで来ているようだった。「どうも」と声をかけて席に着き、いつも通りに立てかけられているメニューを手を取った。メニューは長年蓄積してきたような油の

汚れて、少しべたつとしていたが、まったく気にならなかった。見るとメニューの裏側に赤いバツ印がたくさん書かれていた。驚くことに、ほぼ売り切れているようだった。幸い、食べ収めようと考えていたレバナラ定食には印が付いていなかったの、それを注文した。

「そうと思ったよ。混んでいるから少し時間かかるけど待ってね」

女将が微笑みながらそう話し、また忙しそうに厨房へもどっていった。最終日にかいどうにいたのは、よく見かけるような常連さんばかりだったが、顔を知らないようなひととたくさんいた。真っ白いTシャツに白い帽子をかぶった男性に、いつもカメラを肩にぶらさげている初老の男性。婦人会の方々に、近所に住んでいるであろう三人の家族。普段のコック服からは想像もつかないような、おしゃれな帽子をかぶったパリジャンの店主。そして、かいどうの隣で老舗の八百屋「高野商店」を経営するおじさん。かいどうの四代目店主と話をしたり、料理長の写真を撮ったり、女将と交えて写真を撮ったりと、みんなそれぞれのやり方で、かいどうの終わりと共にいた。そのうち、レバナラ定食が目の前に置かれ、夢中で食べた。食べている途中で、色紙みたいなものがこっちのテーブルへと回ってきた。色紙の真ん中には大きな字で「かい

「どう女将」と書かれていて、その周りにはいろいろな色で、隙間なく描かれているメッセージがあった。裏をめくると、そこにもメッセージが書かれていて、テーブルにいた三人は裏に「ありがとうございました」「ごちそうさまでした」「最高でした」と書いていたが、私はなぜだか、表に書きたかったので、少しの余白に、「レバニラ定食は最後まで絶品でした」と書き、その下に自分の名前を書いた。色紙か、いいな。うれいだろうなとぼんやり見ていると、彼女の名前を見つけた。ドクンと心臓が跳ねた気がした。ここにいるのか、とあたりを見回したが、特にみつめることはできなかった。

「どうぞどうぞ空いてるところに座ってください」女将の声がした。あとからあとから店の外から途絶えることなくお客さんが来ているようだった。あとから来た方々に席を空けようと、私はカウンターへと移動した。

「おう、お前が来るかと思って、レバニラ定食一人前は残しておいたよ」

カウンターへ移動した私をみるや、店主がにこやかに笑った。眼鏡の奥に、少し寂しそうな色を感じて、私は「ははは」と笑っただけだった。料理長は相変わらず沈黙していて、次から次へと流れてくる注文に答えていた。いつもはカウンターにどんぶ

りや皿がたくさん並んでいるが、今日はすべてしまわれていたの、厨房の中、店主と料理長の手さばきがよく見えた。

「きみはよくきていたのか」

カウンターの隣になった方が前触れなく私に話しかけた。いつも肩からカメラをぶらさげている初老の男性だった。

「ここ一年くらいですが、よく来ていました」

「そうか、おれはもう長くここにきているよ」

「そうなんです」

彼は近くの役所で働いていて、三十年近くかいどうの常連だった。昔から桜丘の写真撮るのが趣味で、もう何年分にも桜丘の写真をもっている。長年変わる ことのなかった桜丘が、ここ何年かで急激に変わっていくことを、興味深くも寂しく思いながら、写真を撮っているようだった。彼と話をしながら、かいどうが立て壊されたあとは、東急のビルが建つことを知った。かいどうは、東急ビルが建ったあとの場所と区画を押さえてはいるけど、営業を再開するかどうかはわからないようだった。

そのうち後ろのほうで誰かが、「みなさん、聞いてください」と叫んだ。振り返る

と、店主と料理長と女将が立っていて、隣には小さな子供三人が色紙を抱えて立っていた。さつきみなは注目を集めた人が、どこから出したマイクを、店主に渡した。「みなさん、今日は本当にありがとうございます。僕は、四代目の店主です。かいどうの歴史を途絶えることなく、まだまだ続けていきたいと考えています。みなさんの応援にお返しできるよう考えてきますので、また再開した際には、ぜひお越しください」とスピーチした。料理長は「ありがとうございます」と短く述べた。再開したいとは言っているが、聞いた話によると資金的に難しいようで、まだわからないのだそうだ。女将は、桜丘が変わっていくことにさみしさを覚えていたようだった。おしゃれなビルには似合わないし、今の食堂の形態は流行らないけど、それでもせめてかいどうは変わらない存在でいたいと思っていたことがわかった。かなわないけど、それでもこうしてみなが来てくれてうれしいと話していた。話しながら涙をこぼしている女将を見て、店内にはさみしい沈黙が流れた。まだまだだと思っていた終わりが、刻々と近づいていることを、みんな意識しているようだった。三人のスピーチが終わると、隣に立っていた子供たちは、少しもじもじしながら、ひとりひとりに色紙を渡した。店主と料理長と女将は頭を下げ、私たちは拍手をした。どこから嗚咽が聞こえて、

どうしようもなくきみしくなった。みんなで記念写真を撮ると、自動ドアがまた開き、また違うお客さんが入ってきた。三人はあわただしく厨房へ戻り、店内はまた喧騒に包まれた。うるさいはずなのになぜか心地よかった。

そしてついに閉店の瞬間がやってきた。二十三時閉店のはずだったが、二十三時には閉まらなかった。お客さんも少しでも長くかいどうを味わっていたかったし、女将たちも、かいどうを閉めてしまうことが惜しかったようだ。結局夜中の一時まで営業終了時間が伸びた。机に散らかったビール瓶や皿や割りばしを、残ったみなで片づけて、会計を済ませると、女将たちがひとりひとりに握手をして、私も含めてお客さんはみんな外に出た。振り返ると、明るく光っていた壁面看板の電気は消えていた。ほんとうに終わったのだと物語っているようだった。「ありがとうございました。」と、店主、料理長、女将の三人は店の前で残ったお客さんにお辞儀をして、さみしそうな顔で店に戻った。私はしばらくその場で立ち尽くしていたが、しばらくして、かいどうをあとにした。

帰り道は、彼女のことを思った。彼女とかいどうで何回か食事をしたあと、彼女の転勤が決まった。桜丘からはるか遠くへ行くことになり、「かいどうに行けないの

2018年10月20日

は残念」だと嘆いていた。結局最後まで連絡先を交換することはなかったのだから、彼女がどうしているのかは全く分からなかった。彼女もかいどうの最終日に来ていたのか。そう思うとなんだかうれしいような、切ないような気持ちになった。もう桜丘へ帰ってきてても、かいどうはないのだと知ったとき、どんな気持ちだったのだろうか。私の注文も聞かずに得意げにレバニラを頼む彼女の顔が浮かんで、消えた。

第二章 あおい書店



2010年3月 - 渋谷南口店開店

2018年10月24日 - 閉店

今日は、十月二十四日。渋谷のモヤイ像を横目に、桜丘へ向かう。歩道橋を登る。高架下の玉川通りには車がびゅんびゅん走っている。歩道橋から桜丘の街を望むと、あおい書店の看板が私の目に飛び込んでくる。あおい書店は桜丘の入り口にあり、シンボルのような存在だ。書店はさくら通りの桜並木のふもとにある。

感傷に浸るのには理由がある。今日は、十月二十四日、あおい書店渋谷南口店（ななで桜丘店じゃないだろう）が閉店する日なのである。

もしかして閉店値引きセールでもやっていて店先にワゴンが置かれ、そこに山積みになっているのではないだろうかと思っただが、そうだったことは一切なかった。本屋という形態上、できないのだろう。残念。ただ、入り口のドアには「閉店のお知らせ」という張り紙が貼ってあり、お客さんが写真を撮っていく。張り紙には次のように手書きで書いてあった。

「2010年から8年間、ご愛顧いただきありがとうございます。桜丘の再開発に伴い、10月24日をもちまして閉店とさせていただきます。桜丘初の大形書店としてオープンして以来、地元の方を中心に多くのお客様に恵まれてきました。長年のご支援、感謝申し上げます。あおい書店店員一同」

中に入ってみると、夜十時にも関わらずいつもより人が多い。どうやら別れを惜しむ客が最後に訪れているようだった。渋谷はどこもうるさく、人も多い。書店も例外ではない。でもこの書店にはそれがなかった。確かに玉川通りや首都高は近いけれど、渋谷駅前のような喧騒はない。地元の方々に愛されていて、いつもぼちぼち人がいる印象だ。

行ってみて面白かったのは、閉店値引きセールこそやってはいなかったが、渋谷に關する本が閉店フェアと称してまとまってディスプレイされていたことだ。見たこともない渋谷の関連本がコーナー分もあり、興味津々。他のお客さんも結構いて、ちょっとした人だけに。いくつかの本を手にとってパラパラとページをめくってみた。その中に一冊、『渋谷学』なるものを発見。「面白そうだったので、全く買う予定はなかったけど記念に買うことにした。」

そのコーナーで七十歳か八十歳くらいのおじいちゃんが一人、熱心に本を眺めている。どうやらその本は、かつての渋谷の絵やイラストが挿絵として入っていて、渋谷の歴史をまとめている本のようなのだ。ぽろっと、「懐かしいねえ」と言っていた。私はちょっとグツときた。昔の渋谷や桜丘を知っているのだろう。渋谷は変化を繰り返し

ている。その変化におじいちゃんはずっと立ち会ってきているのだろう。桜丘も今、まさに変わろうとしている。『記憶のなかの街渋谷』と『春の小川はなぜ消えたか』を手を取っていた。もしかしたら「春の小川」の時の渋谷川を見ていたのかもしれない。今では再開発の波が押し寄せ、最近では渋谷川の隣に「渋谷ストリーム」というビルが建設された。「春の小川」の姿は見る影もなく、すっかりドブ川と化している。結局、おじいちゃんはその他いくつかの本を立ち読みしてからその二冊を持ってレジに向かった。私は彼の後ろ姿を十秒ほどぼうつと眺めていた。

あのおじいちゃんの話を知りたい！と思い、思い切って声をかけてみることにした。

「あの…すいません」

訝しげにこちらを見ている。

「すいません。ちょっといいですか」

「なんですか」怪しげに聞く。

「ちょっと気になっちゃって。当時の渋谷を知っているんですか」おじいちゃんの持っている本を指差しながら聞く。

「ああ、これね。近くに住んでるからね。懐かしくて買っちゃったよ」可笑しいことを言うように教えてくれた。

「桜丘に住まれてるんですか」

「ぎりぎり鶯谷のところだね。まあ、桜丘みたいなもんだよ」

「そうなんですか」

「…」

「今日、閉店ですね」あおい書店の閉店のことについて聞いてしてみた。

「ああ、そうだね。残念だね。またおんなじようなビルが建つんだろ。風情も何もないよな。便利だったのにな」

「そうですね。よく来られてたんですか」

「まあそうですね、たまにね。夜遅くまでやってるしね、比較的落ち着いてるじゃない」

「そうですね。再開発、反対派ですか」

「賛成も反対もないよ。もう始まったことだし。ただ好きな店が潰れて、またビルが建つてもな」

「そっか…」その通り過ぎて私は何も言えなかった。

「あんたらしいけど、年寄りが行くところじゃないだろ」冗談のように笑いながら言っているが、私には彼が本気で言っていることが分かった。

「そんなことないと思いますよ。お年を召した方でも行けると思いますよ！」

「まあな」鼻で笑うように言う。

「でも行かんよ、きつと」真実を言われた気がした。

「…そうですね。ありがとうございます、こんな質問に答えてくれて」

「まあいいよ。少しは参考になったかな」最後も笑ってレジに向かった。

おじいちゃんが去ったあと、私は少し感傷的な気分になってしまった。心を切り替えて、好きな作家の新作が最近出たのでそれを探しに二階へ。二階もいつものこの時間より人がいた。仕事終わりのサラリーマンが多い。欲しかった本を探している途中でたまたま『再開発は誰のためか―住民不在の都市再生』という本を見つけた。今の状況にびびりだった。手に取り、立ち読みしてしまった。冒頭にはこんなことが書いてあった。

「オリンピック、国際競争力の強化、防災、コンパクトシティ―さまざまな美名に隠された都市開発は、いったい誰のためなのか。アベノミクス都市再生で、地域住民

のくらしと権利が壊されてゆく」

再開発は不動産業者やゼネコンの金儲けのためにある。しかも、それは住民の犠牲の上に成り立っている。そういった内容が赤裸々に書いてあった。きつとそうなんだろうなあ。私は少し寂しく、悲しくなり、その本を置いた。

お目当の本を見つけたので、二冊を手を持ち、私はレジへ向かった。レジは三カウンターあったが、全て埋まり、二人が列をなしていた。待っている間、レジを見ていたのだが、店員さんはとても丁寧で、温かかった。いいなあ、と思っていたら「先頭でお待ちのお客様、どうぞ」と呼ばれた。

「大変お待たせいたしました」から始まり、店員さんの対応はとても真摯だった。会計を済ませると最後には、「長年のご愛顧ありがとうございます。ご存知だと思いますが、本書店は今日をもちまして閉店とさせていただきます。ポイントカードは引き続き、池尻大橋店をご利用いただけますので、ご利用頂ければ幸いです。また、良ければ閉店記念のしおりをお使いください」

閉店の記念品としてしおりをいただいた。形は一般的な短冊形のしおりだったが、さくら通りの桜並木がデザインされていて、桜丘に根ざしていたのだなあと強く感じ

た。ずっと使いたくなるものだった。

「かわいいですね」

「かわいいですよ！ありがとうございます」

「閉店、とっても残念です」

「そうですね。私も残念です」

「近くに移転とかできればよかったですけどね」

「そうですね。桜丘、気に入っていたので、ホントに残念です」

私との会話の時、店員さんは袋詰めなどの作業を全て止め、私の顔を見て真摯に向き合ってくれた。

「チェーン店でしたけど愛されてましたもんね」

「そうなんですよ！今日とかも『お疲れさん、今までありがとうございます』とか優しく声をかけてもらって！」嬉々として語ってくれた。

「いやいや、ホントに今までありがとうございますって感じですよ」

「ありがとうございます。これからもあおい書店をよろしく願います」最後は笑みを浮かべながら冗談のようにセールストークをしてくれた。

「ありがとうございます」私も笑って応えてしまった。

店員さんとお別れをして、時間は大体二十二時四十分くらいになっていた。閉店する瞬間に立ち会いたかった。営業時間はいつも通り二十四時ということだったので、まだ一時間強時間がある。それまで向かいのキリンシティでゆっくりすることにした。キリンシティからあおい書店が見える席に着いた。ビールを飲みながら、あおい書店をぼーっと眺めていた。この時間でも新たに入っていくお客さんがいた。店先の張り紙を見てから、書店の前で写真を撮っていく人たちが何人かいた。やっぱりあおい書店は愛されているなあ。

二十三時三十分、ビールを二本飲んだところで、キリンシティの閉店時間になってしまった。あおい書店の閉店までの三十分間は、店内をウロウロすることにした。店内に着いた時はさすがに二十四時前でさっきよりは人が少なかった。店内を回って、立ち読みを繰り返していると閉店十分前になると、アナウンスがあった。

「ご来店のお客様、本日はご来店ありがとうございます。ご存知かも知りませんが、本日をもちまして、あおい書店渋谷南口店は、再開発に伴い閉店となります。あと十分ほどで営業が終了になります。桜がとても綺麗なこの場所で、毎年春を迎えるのが

楽しみでした。来年の春を迎えるのは残念ながら叶いませんでした。近くの居酒屋で飲んだ後、酔ってご来店される方もいらっしやって面白い八年間でした。短い間でしたが、ご愛顧謹んで感謝申し上げます。あおい書店をこれからもよろしくお願い致します」

一句一句、つむぎ出すように、丁寧に、一分ほど最後のアナウンスをしていた。

徐々にお店の外にお客さんが出ていった。私も外に出て、シャッターが下ろされ、電気が消える瞬間を目撃しようとした。外に出て驚いた。二四時にも関わらず、外に控えているお客さんが何人もいるではないか。大体十人くらいいる。最後のお別れなんだなあ。店員さんが続々と出てきて並び始めた。さっきの店員さんもいる。こちらも大体十人くらいだろうか。お店の入り口は階段がある。一段高いところに店員さんが一列になった。一段低いところに、お客さんがめいめいに集まっている。

店長らしき人が一歩前に出て挨拶を始める。「再開発に伴い、本日をもちまして閉店させていただきます。八年間と短い間でしたが、本当にありがとうございました」店員さんがお辞儀をした。

「ありがとうございます……」お客さんから声上がる。通りすぎる人が、なんだなんだ

と言わんばかりに覗く仕草をする。少しギャラリーが増えた。

「これからあおい書店をどうぞよろしくお願い致します」挨拶は先ほどの店内アナウンスとほとんど同じだったけど、お客さんは感動しているようだった。店員さんは深く一度お辞儀をしたあと、順番に店内に戻り始めた。

「お疲れ様々」「ありがとうとおお！」拍手が巻き起こる。店員さんの最後の一人が店内に入るまで拍手で見送った。お客さんは多いとは言えないけど、素晴らしい閉店でありお別れであった。それから一分も経たないうちに、電気が消えた。そしてまたシャッターが降りた。お客さんは後ろ髪を引かれる感じもありつつ、徐々に渋谷駅の方に消えていった。寂しさは私の胸に残った。

第三章 富士屋本店



明治 18 年 - 酒販店として創業
昭和 46 年 - 立ち飲み酒場へと改装
2018 年 10 月 30 日 - 閉店

十月三十日。十八時半過ぎに富士屋本店に着いた。最終日ということ、やはり多くの人が並んでいた。最終日にも関わらず、営業はいつもと同じ二十一時閉店ということだった。十八時半の時点で、私の前には十五から二十人くらいが並んでいた。ああ、もしかしたら入れないかなあ。いや、さすがに入れるかあ。そんな思いが交互にやってきた。列は、先日二十日に閉店したかいどうの店先を抜け、歩道に沿って途中で折れ曲がりドトールの近くまで伸びていた。私が並んでからもすぐに後続ができるほどだった。やっぱり富士屋本店は愛されているなあ。

その列はなかなか進まなかった。しびれを切らし、暇だったので、前の人に話しかけてみることにした。話を聞くと、その人はサラリーマンで、恵比寿で働いているらしい。メガネをかけた、少しガタイのよい、優しいおじさんという感じ。昔来たことがあって、今日が最終日だからまた来たとのこと。

「最終日、明日だと思っていたが、今日だったからびっくりした」

確かに、明日が十月三十一日で、十月最終日。再開発組合の話合いで、立ち退きが決まっているのは十月いっぱいのはず。明日は何をするのだろう。

「中は意外と広いんだよ」と、そのおじさん。

「そうですね。外からだとわからないですけど」と、私。以前、来たことがあるから分かる。ビルの地下一階にお店が広がっているのだ。

「あ、来たことあるんだ」

「あ、そうなんですよ」

「最後、入れるといいね」

「そうですね。閉店前なのでお別れを告げたいです」

「そうだね」

秋も深まり、夜はさすがに寒くなってきた。ビル風もびゅうつと吹き、身に応える。何かあったかい飲み物が提供されればいいのに。どうせ閉店するんだから物も残せないし、売り尽くしということで、熱燗でも振舞ってくればいいのに。あんまり熱燗好きじゃないけど。「ハムキャ別」（ハムキャベツのこと）食べたい。

でも実際はそうだったことはなかった。現実はそう甘くはなかった。営業最終日に駆けつけた富士屋本店ファンたちのことはあまり気にかけていないのかなあ。ただ単に中が忙しい可能性もあるけど。

店内から、最後の富士屋本店にありつけたお客さんが出てくる。

「いやあ、よかったな」

「楽しかったわ」

「最後よかったな」

「ごちそうさまでしたあ」

「見て、めっちゃ並んでる」

「うわ、ホントだ。ラッキーだな俺ら」

「な。いや、よかったよかった」

彼らは渋谷駅の方に歩いて行った。ちょっとムカつくけど、まあいい。

そうやってお客さんが店内から出てくると、ぼちぼちと列が進む。結果、一時間ほど待ったところで、先に前のおじさんが店内へ入れることに。

「じゃあ、お先に失礼するね」

「楽しんでください」

それから間も無く、大体三分くらいだっただろうか、私も入れることに。さっきのおじさんからあまりにも早かったので驚いてしまった。「お待たせしました」

地上から階段を降り、地下にある店内へ。案内されるときに店員に「今日は一時間

制なのであらかじめご了承ください」と言われた。「あ、そうなんですわね。わかりました」と答えた。それにしても列は進んでいなかったけどなあ。

火曜日の夜ではあったが、最終日もあって、中は満員で、溢れかえっていた。金曜日の夜に寄ったこともあるが、その時よりもぎゅっちりと、みゅっちりと人が入っていた。熱気がこもり、もわっとなっていた。案内された席は入り口横から少し外れて奥の方だった。女将さんと話しかかったが、遠くて出来なさそう。カウンターを囲む常連客風のおじさんたちと談笑している。時々冗談を言い合って大声をあげて笑っていた。楽しそう。さっきのおじさんは近くにいない。とりあえず着いてすぐ、レモンサワーとハムキャベツ、自家製ポテトサラダ、肉どうふを注文。しかし、店員に断られてしまった。「すいません、ハムキャベツ、もう出ちゃって〜」なんだって。先に言うてよく、それ。並んでいるとき時間あったじゃん。「あゝ、残念。わかりました、はい」「すいません」

料理は全て盛りもいいし味もいい。ポテトサラダも二、三人前くらいある。お一人様には多いくらいだ。肉どうふは冷えた体に染み渡った。追加でしいたげ天と鳥からを注文。定番のなすみそとネギヌタは残念ながらも売り切れてしまったらしい。そ

のほかにもいろんなメニューが完売している模様。追加の品が届いたときにホッピーを注文した。店員さんは忙しそうに話しかけられなかった。ちょっと話したかったが仕方ない。

みんな帰りたくなさそうだった。それでもやはり一時間制のようで、あまりにも長くいるお客さんに対しては「ホントにすいません、今日最後なんで、待ってるお客さんが外にいるんで、ご協力お願いしますよ」と言って、退店を促していた。勘定をしたようだ。「ホントありがとうございます、ありがとうございます」

店内は活気で満ちていた。この場がなくなるなんてもったいないなと思った。立ち呑み屋で、美味しいお酒と美味しい料理をおかずに、次から次へと話に花が咲く。この空気感はどこにもない。誰とでも仲良くなれそうな雰囲気だ。ホッピーが届き、混ぜて作っていると、近くのおっちゃんに話しかけられた。できあがっているようだ。

「珍しいね。今時若いのが一人でホッピー？」

「若くないですよ。それにホッピー美味しいじゃないですか。体にも比較的いいし」

「わけーよ、なっ？」と連れのおっちゃんに聞く。

「若いね」

「なあ。ま、これもなんかの縁だし、乾杯しようや」

「かんぱーい」

三人で乾杯した後、しめ鯖をご馳走になった。しめ鯖も美味しかった。どうやら次のお店にはしごするらしく、もう出るとのこと。勘定するとき「お釣りいらさないから。あげる」と言われ、なぜか二八〇円もらってしまった。勢いがすぐく断ることができなかった。「では、また」本堂に行ってしまった。嵐のように過ぎ去っていった。

ほろ酔いになり、時計を見てみると二十時十分くらいだった。待っている時間の方が、飲みの時間より長いというのはなんだか癪だったが、外で待っている人のことを考えると、少しでも楽しめた私は次に譲った方がいいのではないかと思えた。少しだけ余っているホッピーを飲み干し、勘定をした。勘定の際、やはり忙しそうで少しだけ遅れたが、店員さんがやってきて最後に「本堂にありがとうございまして」とだけ言われた。意外と別れはあっという間だし、さっぱりしているなと思った。もう少し別れを惜しむように懐かしんだり、再開発のことについて話したりしたかったんだけどなあ。写真も撮りたかった。

物足りなさが残りつつ、地上に上がった。二十時十五分くらいだったが、驚くこと

に未だにさっきと同じくらいの列ができていた。正直、後ろのお客さんは入れないかなあと思った。物足りなさを感じると同時に、せっかくだし、閉店する瞬間まで立ち会うことにした。向かいの建物の軒下に立ち、最後の富士屋本店を野次馬的に見物すること。

店内を出てから気づいたのだが、店頭に張り紙があり、「本日最終日につき一時間限りでお願いします」と小さく書かれていた。ちょっと分かりにくいよ。

見物を始めて五分くらい経った時に、店内から男三人グループのお客さんが出てきた。「写真撮ろーぜ」近くにいた私は、撮影をお願いしてしまった。暇だったから了承したが、いぎ撮ろうとしてみると、「大衆立吞居酒屋 富士屋本店 清酒 カンパイ」と書かれた電光掲示板の照り返しが厳しく逆光状態。

「逆光なんですけど、いいですか」

「いいっすよいいっすよ」

「フラッシュたいてちゃってください」

「いきまーす、はい、チーズ」

正直上手く撮れなかったが、めんどくさかったので、とりあえず撮影して返すこと

にした。

「ありがとうございませう」

それから二十分くらい経過したとき、白髪ロングのおっちゃん店員が出てきた。そして突然、「終わりです！」と叫んだ。あまりにも突然で状況がつかめない。どうやら列に並んでいる人も同じ感じらしい。困惑している表情を浮かべているだけで列を崩そうとはしない。それに負けじという感じで、白髪ロングおっちゃん店員は圧強めで「本当に終わりですから!」「もうなんにも、ありません!」「終わらせてください!」「フツー!に!終わりましたよ!」と繰り返して叫んでいた。その語気が強い説得に負けてか、列を作っていた数人は諦めて帰っていった。でも納得していないようで、途中で振り返ったり、抗議したりする人もいた。粘りが強いお客もいて、「外飲みでもいいから」「余っているの少しでもいいから」「いくらでも待つから」と懇願していた。それでも白髪ロングおっちゃん店員は「フツーに終わりましたよ、フツーに。そういうお店じゃウチはないんですから」と繰り返してそれだけを言っていた。抗議するお客にも、列を未だに崩そうとしないお客にも。それでも一部の富士屋本店ファンは諦めず、店先で待っている。確かに考えてみれば、一時間くらい待っているわけ

だし、何かしら余ってそうだし、少なくとも一品くらいにはありつけると思うのも当然だろう。そう思ってた寒い中長い間待っていたのにこの始末だものね。

白髪ロングおっちゃん店員は「終わり」を際立たせようと、富士屋本店の地下に続く階段の明かりを消したら、「その明かりは消さないで」と店の中から声が聞こえた。店内のコミュニケーションも上手く取れていない様子。

「今日は終わり」との知らせを聞いて叫ぶ女性が居た。「ええーっ！？」その女性は男性二人と来ていた模様。連れの男性に対して「信じらんないんだけど。最終日にこだけ待って入れないの!？」と叫んでいた。それに対して白髪ロングおっちゃん店員は「もうなんにもないんです」と連呼していた。私にはお客を返す言い訳をその場で繕っているようにしか映らなかった。それがたとえ事実だとしても。謝ることなく、上から高圧的に断っている印象残ってしまうのは残念だ。

白髪ロングおっちゃん店員は最終兵器と言わんばかりに、「営業終了」の看板をどこからともなく持ってきた。看板はかなり大きく、百二十センチメートルくらいあると思う。用心棒みたいに、店内への入り口のところ立ち、その看板を地面に何度もとんと叩きつけている。そしてまた「終わりです」と言う。ちょっと怖かった。

しばらくして、白髪ロングおっちゃん店員が、後ろの方に居た女性のグループに「営業終了」の看板で写真を撮ってもいいよと言い、ベストポジションに案内した。そういうことはするのね、と心の中で思わずツツこんでしまった。そういったファン対応みたいなことはするのに、なんでもっと「いい終わり方」をしようと思わなかったのだろう。例えば、整理券を配って、ある番号のお客さんまではあるもの限りで対応する、とか。八時以降は並んでもらわないで、最後尾で丁重に感謝を述べお断りする、とか。方法はいくらでもあっただろうに。これまでの思い出が瓦解したお客さんが中にはいただろうなあと思うと心が痛かった。

ディズニールランドに来た女子高生みたいな記念撮影が終わったあと、常連客と思わしきお客の一人が、白髪ロングおっちゃん店員と小声で話していた。面識があるらしく、よしみで中に入れてもらおうという作戦だったらしい。お客がなし崩しの口説くも、「そういうこと言わないでさ」。一人でも入れちゃうと、ほら、みんな入っちゃうからさ」と白髪ロングおっちゃん店員が拒んでいた。

最終的に、場が収まらず、店主のような方が出てきた。とても物腰の柔らかい方だった。ものすごく謙虚に「寒い中お待たせして申し訳ありません。案内できずすみませ

2018年10月30日

ん」と謝ったことでほだされて、これまで帰らなかったお客も帰り始めた。店員の態度一つで、こうも変わるのかと気付かされた。愛されているお店だけにもうちよつと終わり方を工夫して欲しかった。

列に残っていた最後のお客が帰るまで私は見ていた。最後の一人が観念して立ち去った後、私も帰路に着いた。料理やお酒は美味しかったが、閉店の後味は不味かった。

あとがき

M A M A

私たちのグループは桜丘の再開発地域をフィールドに、閉店するお店の最後の瞬間に居合わせることを繰り返してきました。

居合わせることで分かったのは、「想像していたよりも閉店は『さっぱり』している」ということです。閉店は特別な盛り上がりを持つという想像を誰しも持っているようです。例えば、閉店セレモニーに代表されるように、最終日にお店の代表が挨拶をしたり、お客さんが拍手でシャッターが降りる瞬間を見送ったりするような理想像です。そういうイメージを持っているために、実際に居合わせると「さっぱりしている」と感じるのです。つまり誰もが閉店に対して同じようなイメージを抱き、過度に意味付けをしてしまっているということです。閉店の理想像のようなものを共有しているとも言えます。この発見から、私たちのグループは、閉店の理想と現実と着目することにしました。

立ち会って分かった閉店の理想と現実をまとめた文庫本をつくることにしました。それがこの本になります。名前の「とじとじ」は「(お店を)閉じる」と「(本を)綴じる」から取っています。この本では、三店舗(「かいどう」「あおい書店」「富士屋本店」)の閉店に対してそれぞれの理想と現実がまとまっています。居合わせた一人がその閉店の現実を描き、居合わせていない一人がその閉店の理想を想像しながら描きます。

一店舗の閉店に対し現実と理想について二つの物語があるので、計六つの物語があります。その物語を単に順番通り並べて綴じるのではなく、書かれている物語が読者に理想か現実か分からないよう工夫しました。具体的な方法は次の通りです。章が順番に「かいどう」「あおい書店」「富士屋本店」に分かれています。それぞれ理想か現実になっています。つまり二の三乗で八通りの組み合わせがあります。これになります。この本も合計で八種類つくることにしました。そのため、実はこの一冊はその一種類に過ぎません。この一冊の他に七種類の『とじとじ』があります。

この物語を読んでもらうことにより、読者に閉店を体験してもらうことが可能になります。そしてその体験の中で、私たちのグループが伝えたかった「きっぱり」感や理想と現実のギャップを理解できる仕組みになっています。

理想というのは、嘘ではありません。そもそも期待していたある種の真実です。『とじ・桜丘閉店物語』という媒介を通じて、閉店の真実を描こうとする試みなのです。

最後に、校正にご協力いただいた太田風美さん、「『桜丘閉店物語』によせて」を書いてくださった加藤文俊先生には感謝しきれません。本当にお世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

『桜丘閉店物語』によせて

加藤文俊

閉店は、午前零時だと聞いていた。少し早く着いたので、店内をぶらぶらしながら過ごすことにした。平日だったためか、深夜の店内に客の姿はまばらだった。あらためてふり返ってみると、時間つぶしに立ち読みするばかりで、この店で本を買った記憶がなかった。ちょっと申し訳ない気分になる。ひととおり書棚を眺めてから、せっかくなので、本を三冊えらんだ。『日本史の論点』『薄情』『手ぶらで生きる。』は、最初で最後の買い物になった。あと十分もすれば閉店になる。レジのカウンターを挟んで、店員と事務的にやりとりをする。顔を覚えられているわけでもないし、そもそも、「長い間、ご苦労さまでした」などという台詞が、自然に出てくるほどの想いもない。ぼくは、たんに閉店の瞬間に「居合わせる」ことを目的に訪れた、野次馬のような存在なのだ。

店の外に出て、午前零時を待った。店内には、数名の客しかいないはずだ。そして、

ほぼ定刻どおりに、シャッターが半分くらい下ろされた。ドアの下半分から、店内の白い灯りがもれている。閉店の瞬間に立ち会おうという人は、他には誰もいない。帰路を急ぐ人びとは、ほとんど無関心のように、店には目もくれずに歩道橋に向かう。

ぼくは、いつの間にか「最後の日」を、ドラマチックなものに仕立て上げていたようだ。もちろん、界限では「さよならパーティー」を開く店も、別れを惜しむ常連たちや（ぼくのような）野次馬的な客の行列ができる店もある。それなりに、感情的なつながりを感じていた場所もあった。あのジャズ喫茶も、ついに看板を下ろした。ぼくが長年通っている歯科医院は、気づけば移転していた。何事もないかのように、ごくふつうにシャッターが下りるのを見て拍子抜けしたのは、ぼくが勝手に想い描いていた「最後の日」のイメージと大きくかけ離れていたからだ。一人ひとりに個性があるように、「閉店」の迎え方はさまざまだ。そう考えれば、ごく自然に閉じる店があっても不思議ではない。

あれからも、たびたび閉店後の書店の前を通りかかる。いまでは、窓ガラスはベニヤ板で覆われている。夜ごとに、大がかりな工事がくり返される。ほどなく、この一帯は大きな仮囲いの向こう側に隠れてしまうだろう。仮囲いができればなおさらのこ

と、工事現場はぼくの日常から隔離されてゆくにちがいない。じっくりえらんだはずの三冊の本は、ろくに開かないまま、すでに書棚に埋もれてしまった。『薄情』なほどに。

もちろん、店主や常連たちの毎日は、あの晩を境に大きく変わったはずだ。シャッターが開かなくなったのは、大規模な再開発計画の都合によるものだ。誰かが決めた「最後」なのに、ぼくたちは過剰に反応する。メディアでは、たびたび感傷的なシーンが描かれる。長きにわたって愛されてきた店は、惜しまれながらシャッターを閉じる。再開発の計画は、無遠慮に古き良き風景をのみ込んでゆく。だが、そんな「ものがたり」さえも、ぼくの想像にすぎないのだ。だから、「最後」かどうかは、ぼくが決めればいい。「閉店物語」は、いくつもある。むしろ、いくつもあったほうがいいのだろう。

『桜丘閉店物語』は、不思議な本だ。同じ形や大きさで、同じ表紙をまとっていないが、中身が（微妙に）ちがう本があるというのだ。手に取った本には、どのようなエピソードが束ねられているのか。それは、まちで偶然に出くわすハプニングのようなものだ。まさに、閉店をめぐる「ものがたり」がいくつもありうることを、まっすぐに伝えようとしている。その素直さが、気持ちいい。「最後の日」に居合わせた人も、

頭のなかでドラマチックな光景を想い浮かべた人も。そして、数か月にわたって、桜丘を歩いた三人も。一つひとつの「ものがたり」が、「真実」かどうかは問題ではない。フィールドワークを重ねながら変化を目撃し、幾度もまちについて語ったうえで綴られたのだから、すべてが「本当」なのだ。大切なのは、まちの風景が大きく変わってしまったとしても、このちいさな本があれば、ぼくたちは、また「閉店物語」を語りたくなるということだ。

とじとじ - 桜丘閉店物語 -

paikka books

ま - 3 - 5



平成三十一年一月二十二日発行

著者 M A M A

(木村真清・笹川陽子・染谷めい)

慶應義塾大学加藤研究室

〒二五二〇八八二神奈川県藤沢市遠藤五三三二

慶應義塾湘南藤沢キャンパス

<http://vanotica.net/paikka/>

無断複写・複製・転載を禁じます。

ISBN4-15-03-112469-4 C0194